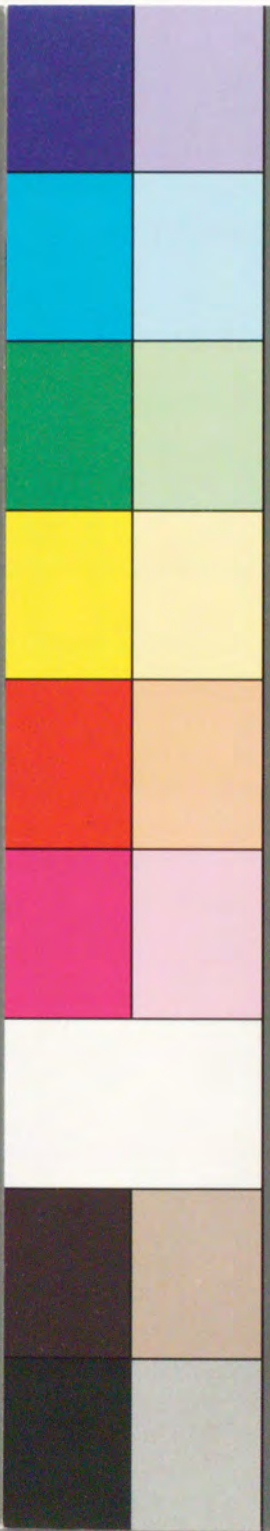


Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



新編二十四孝繪抄

全

乙巳孟春
大梁堂版

史唐王れ二十四孝は性善より、毫末の教種に於いては、何の便より承く
世小傳を事りぬる四百里州の孝子よりふせ人限ゆる如き名
目の奉に神國の功一よりかへして仁義五常は道なりと云ふ石乃
ねせぬも存がどして孝子貞女歳千人なきやう哉今の世小傳する目新
義烈を感てつらも物屋敷の應なるやうな中に女子が必讀の文
世小傳に載れる物の奉けらるゝ極まるまで大學おけるを求めに
いふがごとく誠意の廿四孝をおぼえ二十四人と一組の冊子になすべし
減は九牛が一毛のよりよじ今世の幼童に道をめたる程更に見
せんより女子の親善のためにもあらうと本宅の好みにすゝめ撰むべきやと

天保十四癸卯十一月稿成

樂亭主人述



仁徳天皇

應神天皇弟の宮に

孝行ふりてせむ

あふ小父帝第五の宮に

宮に就てありて太子に

立られたる翌年崩りてひめ

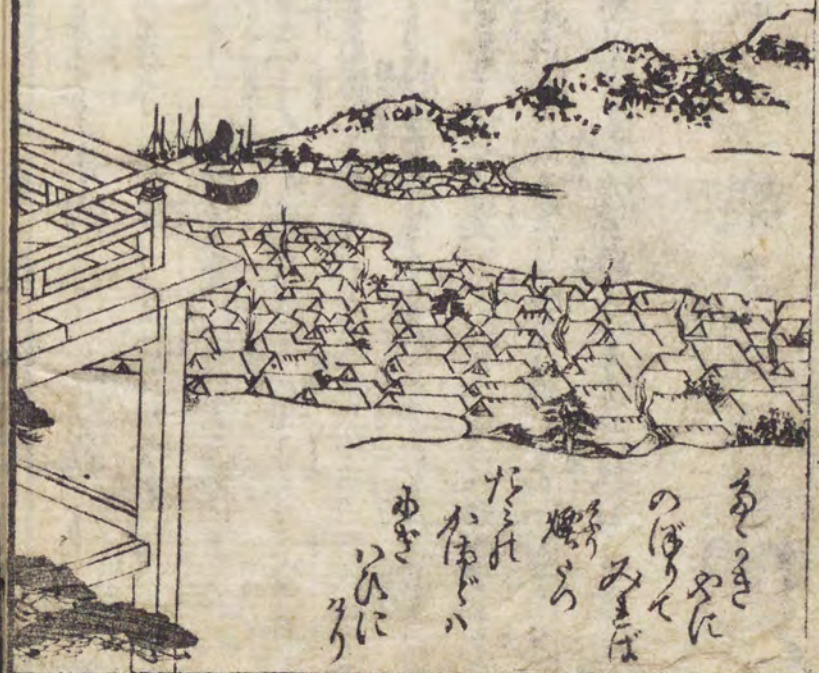
かそいらはとの宮天皇の兄

なれば孝行のつげありと

のりて天皇の父の御遺言

なまばいらはとふ

必死治めんとてたふふ



あふき
のぼりて
みまは
煙る
たふれ
かきどハ
いかに
なり

あつて三年たて民の首を割り
たり後いらはとの宮に
あひて天皇をせんさき
孝行ふりてせむ



養老孝子

其法のほに多
 老
 父小孝行あり
 父老に酒を好めり
 子新をあらけ
 その買ひて酒を
 調へ申さひり
 ある時ひふを新を
 ある時ひふを新を
 水紙すくひ香けを味も香も
 めをこれ酒ふれがたふもるひ



やぐんぬもこび父およわん
 乃其老の姿も老やくやどの
 素の酒なりけ事
 帝きじめ孝心れ

御威ありて美満ちれ
 なされその水と



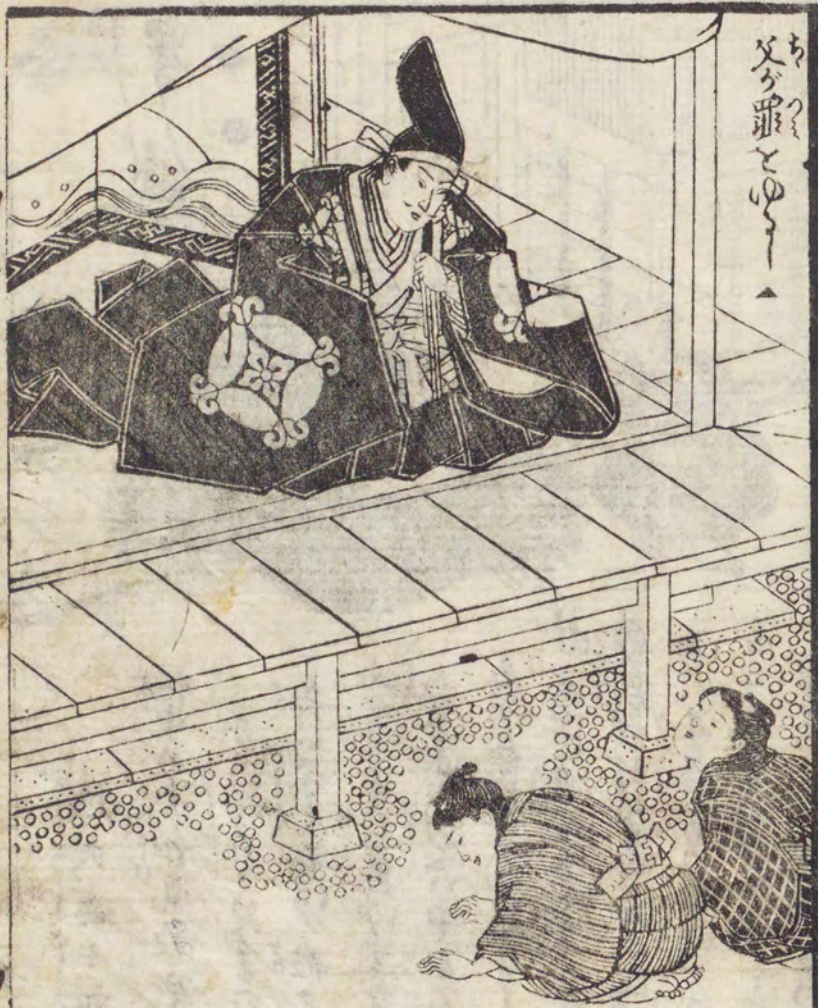
丈部三子

元正天皇御かん時
 漆の白文部つぎの若勝
 う新あらたむかひあふとて
 流罪りゅうざい小室こむろよりなせ
 若勝男子わかつし三人あり
 兄ハ十二才次ハ九才其弟ハ
 七才なりける父ちちが罪つみと
 かりし官所くわんじょよりあり
 三才のめいのあり
 是と見ればもほろへ



三人とて
 まげ死しなす
 けいけい奏そう
 帝みかど聞きこゆ
 感かみのひ
 父ちちが
 名なを
 あり

父が罪とゆへ





樵夫喜十郎

侍中の玉和氣歌集ふさう村
 小松十郎とよめるものあり一人れ
 母に孝公あはく^{うれ}故が病二人たり
 あうともお節置ゆうなりされども
 母そとの方へゆくを^{まづ}き
 幸都に書ないうるある小女房
 れらうじ^し深きとてふ三人ありを
 難別^{やまべ}に村のめどもき^いぬりみせと
 母に不孝^{ふかう}けいのつふぢうべきことふ
 かきみる人もなくあす死うり今
 日かなうち何て方々由りなきと

矢田部黒磨

武苑園入間歌の人なり

父母ふねく孝あり

けつ父母

むねくありけり

悲しふたれと

十六年の間あき

食物よく精進し

引ふりぬる

帝此う聞し

威ト多ハ

門小あうてきて

奉貢その外

りあて

役あうその

孝行をあらう

先仁大い

所代あり

七日



藤原衛

賜方大に藤原に

内膳の第十に

あまのりなり

二果はとれぬに

あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり

源氏物語

あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり

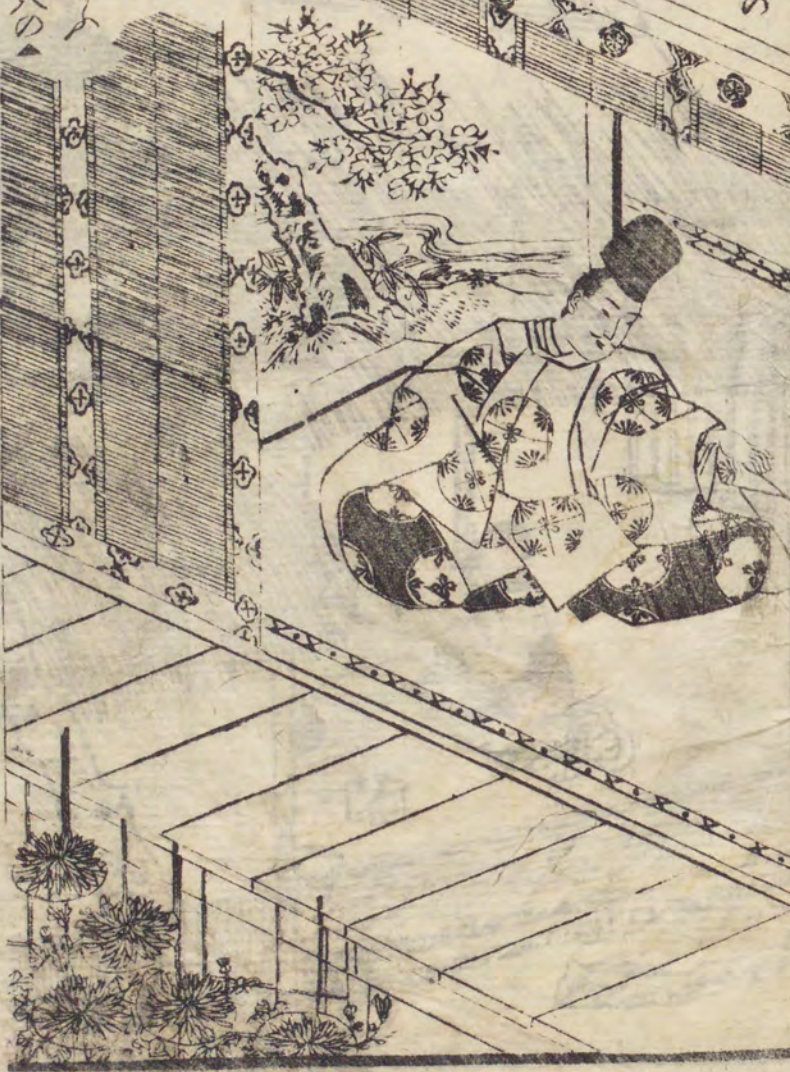
あまのりなり

あまのりなり

あまのりなり



あまのりなり





波自米女

米女ハ野馬の上

あゝ勢の人なり
不幸に成てまふ果く遠く

うりながら帰くく楊をよりの

救多ありけれど田かへはりて
再びまふまふは只父母まづまて

孝は清し父母をまづまのりて

裏に刀り小盾をまてありおろ

所の人を孝を屏をまて

上へ祈へるは時の帝

あり



すまふ

その責

世は

名を

まて

あり

紀夏井

從たづなにたづな下した紀き

善孝子なり

心清く學文あはる

仁壽の帝

此就屯にあはる

右中辨ふ

孝行ありて世にすむれ

うむむむむ

悲しき事之にあらざるを

10



あ
う

卷之八

快

24

うきふ納め

朝夕也

ちち
の
せ
お

主の

木
子

三事也

仕

その孝行
よ

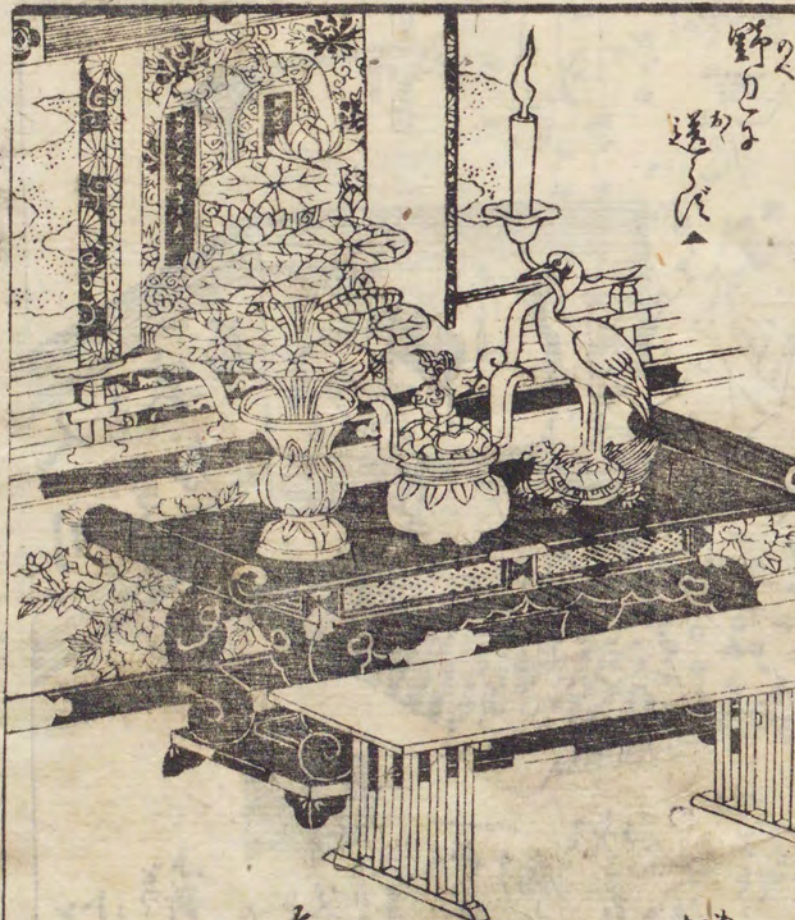
世不

なる

6

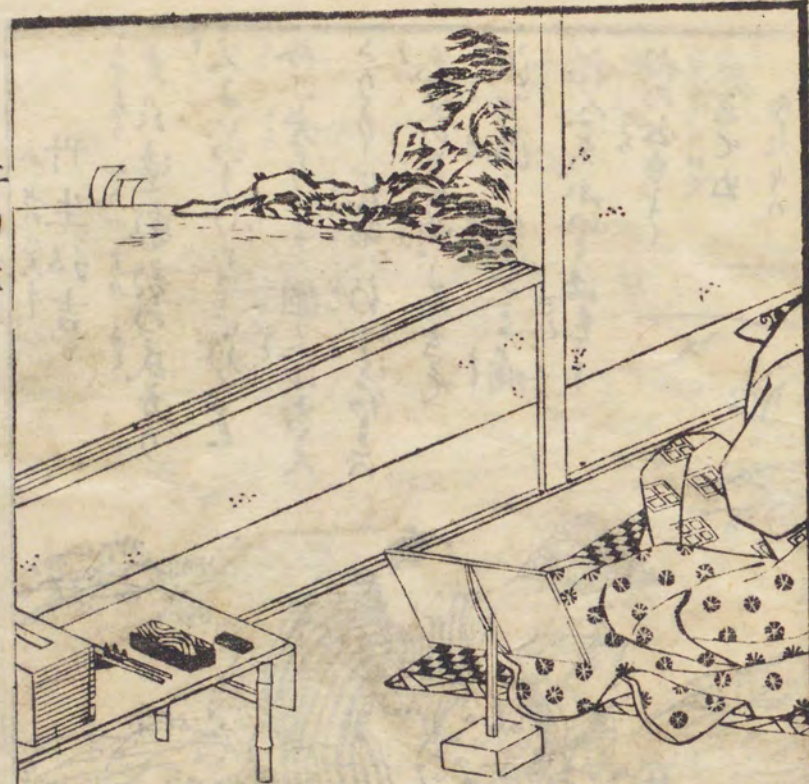
野乃子
送る

送





小野篁
 小野長岑の子
 たり天長九年
 父ふかきと承和
 二年遣唐使より小
 母のふかきと承和
 病し稱して道より
 ゆるすのゆゑ小野篁
 のふかきと承和
 ぬはしててのや
 紫衣のふかきと承和



あせきふかきと承和
 孝のふかきと承和
 たへん方が其
 翠年百端されん
 冬後従二位ふ
 叙せしむるや
 朝の大徳と
 あふかきと承和

丹生弘吉

父あはれけちてあま
 父あはれけちてあま
 母小孝なると國人ふあえ
 うりり死なれりといふ
 先父の墓所よめき
 涙を流し絶ふと痛
 移へるふいとあえ
 母の公もよう
 慰めて出
 めんたる



されは
 その里
 不机
 糸
 人
 七

▲おのれ田舎
 水横早秋の愁もあ
 宮も入らざりけり
 仕事内程に夢を
 石をさして
 その田舎編り
 今も信ふ
 のわけとあり

大江舉周

大江匡衡は子ふて母を

赤坂御門より奉周がりて病を

種すくなく見えけり

赤坂下町にて

恒吉小僧



孝子の命にかゝると

折檻をうけ

かゝるんと祈る命は

はたゆりまゐるれり

と母をのりければ奉周を

うちまゐりて母を

奉周此うと

孝子恒吉小僧

の命と云ひて母を

あはれとて

母を

母を

母を





▲佐々木
あふて
かあつて
まふける
かきこ
ふふ
かきこ
ふふ
孝心
あり

隨身公助

東三條大改修の
所ある武則が子なり
右をける場の戦うと
ありくををりよりそおまをれあ
所ふて父の公助成さんふちやうあや
あふりされども公助初うべそ父がふみ
さうふおまをり後ふ人々あじ途
さりとお孫ければさきで家わけん
父あ残つるものやほまの死をれあじ



伴直家主

安房のまゝの歌れ
 氏おて歌ふ孝乃かりけり
 父母終りけり六やふ美食成
 今更にわきまのどき
 歌ふこも二親の邊成
 木更作り晴日
 折ふあめかたけ



羽衣伝

徳をさうて
 信うて家
 すう人の
 世お在り
 何れもさう
 折のふまゝの
 いひとあけり
 此のけひ子内裡不
 ちあえて後成揚り



水、年貢、ゆき、さき

あんなうるや
徳良何某と

名以人

男子

儼々焉不

かきと糸より

後妻とむる

以妻初不加子男

あつて拍ちやうく文と通つうト多紙

何某園いづく望をふ文と

さしとるゝ物紙張のまれば

戸隠山へもあそび来のむせり



老翁此意

木旁無下

付一丸本稿

22

わたりて

兕觥

一志未成

そのちう
わい

中
と
ね
と

み

はる

卷之五

2



子に足せし

けふそのまゝ継母

羅漢すゝん

ちひ

事出文



茶

[illegible]

三

續書

かひ

あまの

子

あやうかん

佐紀民直

大和の西依紀といふ
所の民の直氏の娘
なり同下巻の

大和忌寸

果安といふ

人の妻と

ぬぐ不幸に

あてまふ

道と

守り

舅姑

孝行はしめて

継母といふが

中つと合せ

八人つりけるを

かくつりけるを

民理のたき

たき燃れた

むとうとあらぬ

賢女といふ人

感づけるなり



小松内大臣

内大臣重盛の平相公
清盛の病なりあるに
父の清盛をとりて
君成ありて民を
苦めよとて低き
あまふとて重盛を
邪きく神明あつて
形へのなりてさあ
いさめ令れとてゆめを



父を
引入さんと
いさめ
あまふ
大連と
あまふ
すめ



平家の世
かき
なり

孝子今女

大和の風竹の内村か
 何れか見女今女といふ人へ
 ひとりの親を法とていふまゝめく
 父も年もいぬまゝおせだの
 人ふおとくまゝめく
 おれはむだるだ
 父のいふまゝめく
 おれはむだるだ



大和の風竹の内村か
 何れか見女今女といふ人へ
 ひとりの親を法とていふまゝめく
 父も年もいぬまゝおせだの
 人ふおとくまゝめく
 おれはむだるだ
 父のいふまゝめく
 おれはむだるだ



孝子今女
 大和の風竹の内村か
 何れか見女今女といふ人へ
 ひとりの親を法とていふまゝめく
 父も年もいぬまゝおせだの
 人ふおとくまゝめく
 おれはむだるだ
 父のいふまゝめく
 おれはむだるだ



北條泰時

北條泰時

北條泰時は、其時の長子なり
 則ち其の幼少より、
 其れども父存生れり、
 あり泰時、
 その所爲、
 法をて、
 ぬ法ありける、
 ぎふあわ、



北條泰時

薩摩福依賣

薩摩の玉れおき
 氏の娘なり父母老て元
 より家老を常に病あり
 福あかちおとろ人ふ
 雇はるるれ物を得て
 父母を中るひ養ひてあり
 ありてそるひ中るあり
 父母を中るひ養ひてあり
 二十歳にふり仁者の帝の
 おんを養育しけり

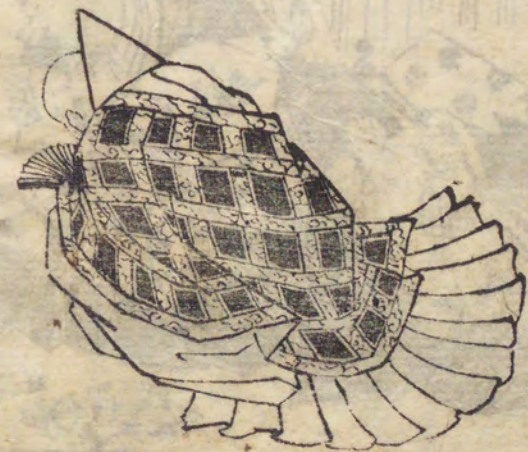


位三級と賜り
 門下ありとて
 家老なり
 たり



後三條院

は帝いまだたふとてを
 申けるを業に小斗ね
 ぎませぬひたり成る信都
 りは信所折く折折小
 まなりけるが或とも何のさえれ
 折折中斗とて手合せ
 ろふとわとる孫
 まうけまへ
 帝園ー
 めされ



我父の山在世と十代

万世といふ所ふやもすれ
 我即後のこととてふかの
 出来てはふつかりあふ
 主公の物ねやうふとて
 小斗いふとてあふとて
 養ふさせ
 養ふあう
 四男を
 かくれば
 四男は
 大下め
 清なりと
 あり



撰者

樂亭西馬



畫工

橘庵貞房



天保十五甲辰冬十月發市



東都書肆

南傳馬町三丁目

三河屋善兵衛

早引寺子節用集

角觚詳説沽金剛傳

前編後編

御年中手紙案書

增補塵劫記

御家流手紙之文

誹風柳樽

手形諸證文

名頭入

自我傷

假名付平力十

實語教童子教

無点

名頭國尽

郡付入

天保十三年壬寅九月吉日

東都書林

南傳馬町三丁目

三河屋善兵衛板

